熊本伝承物語

〝くまもとの宝〟を受け継ぎ、後世に伝える人々

第4回 ―熊本城篇― その2

鯱瓦の守り人

伝承者
藤本鬼瓦 藤本康祐さん 修悟さん

藤本 修悟
ふじもと・しゅうご
1988年（昭和63）生まれ。宇土市小川町出身。東京でシェフ、ソムリエとして働いた後、2018年、25歳で藤本鬼瓦に入社。父の康祐さんから、伝統技法のイロハを学ぶ。

藤本 康祐
ふじもと・こうすけ
1960年（昭和35）生まれ。宇土市小川町出身。藤本鬼瓦代表。2010年から鬼師として父の跡を継ぎ、伝統的な技法などの数々の建造物を手掛ける。

先代の手掛けた遺作 天守とともに被災

「まさか自分の代で、再びしゃちほこを造ることになるとは、夢にも思っていませんでした」。県内で唯一、鬼瓦の製作を手掛ける「藤本鬼瓦」の代表、藤本康祐さんは、完成したしゃちほこを前にそう語ります。

熊本地震で大きな被害を受けた大小天守。多くの瓦が崩れ落ちるなか、各天守の一番上で熊本の町を見守っていたしゃちほこも破損しました。実は、壊れたしゃちほこは、康祐さんの父で2010年に亡くなった鬼職人の勝巳さんが、07年の熊本城築城400年に合わせて製作したものです。康祐さんは、その作業を勝巳さんとともに手掛けた経験を持ちます。

ところで、ほとんどの日本建築の屋根の端には、鬼瓦が鎮座しています。元来は、厄よけや魔よけの意味があり、1300年以上前に大陸から伝わったといわれます。しゃちほこも、その鬼瓦の一種。正式には「鯱瓦（しゃちがわら）」といいます。城の天守をはじめ、神社や寺院などの建物に設置された棟飾りです。頭部は虎で、体は魚に似た想像上の生き物がモチーフになっています。口から水を吐くといわれ、火よけのまじないともされてきました。

これらの鬼瓦造りを専門に行うのが〝鬼師〟と呼ばれる職人です。「藤本鬼瓦」は康祐さんの父・勝巳さんの代から続く、鬼瓦製作専門の工房。現在は、長男の修悟さんも弟子入りし、三代でその技が受け継がれています。

熊本地震で破損したしゃちほこの大きさは、大天守で高さ約120㌢、重さ80㌔。小天守で高さ90㌢、重さ50㌔。屋根の上にそれぞれ1対、載っていました。

「父は、築城400年で新しいしゃちほこを造ったとき、『今後100年、風雨にさらされても壊れない』と自信を持っていました。強度にも配慮して造っていたんです」。父・勝巳さんの遺作となったしゃちほこは、康祐さんにとっても誇るべき作品でした。

ところが2016年、熊本地震が発生します。康祐さんは震災直後、テレビで流れる熊本城の映像を観た瞬間、「しゃちほこがない！」とすぐに気付きました。どこかに引っかかっていないか、血眼になって画面の中を探しました。結局、大天守のしゃちほこは落下し破損。小天守は屋根に残っていたものの、台座が傾くなどの状態でした。父の遺作の惨状に、康祐さんは大きなショックを受けたそうです。

そんな康祐さんに昨年秋、ある知らせが届きます。それは、熊本城大小天守2対のしゃちほこの製作依頼でした。

職人の魂を込め 熊本城のシンボル再生へ

「熊本城の新しいしゃちほこ造りの依頼を受けたとき、プレッシャーを感じなかったといえばうそになります。天守のシンボル的な存在を自分が手掛けるわけですから…。しかし、県民・市民が復活を心待ちにしていらっしゃる。その期待に応えるような立派なものを造りたいという気持ちが、自分の中でどんどん強くなっていきました」と康祐さん。

今年3月から、土の選定や土作り、原寸大の設計図作製などの準備を進め、しゃちほこの形成に着手しました。設計図に照らしながら、粘土を下から丹念に積み上げる作業は、かなりの集中力と忍耐力を要したそうです。

7月中旬には形が出来上がり、乾燥の工程に入りました。工房には、4体のしゃちほこが堂々たる姿で、最後の窯入れの工程を待っていました。

康祐さんは「一から始めていたら、もっと大変だったでしょうが、父がやっていたことを間近で見ていたので、困難な工程はあらかじめイメージできました」。父の背中から学んだ前回の経験は、鬼瓦職人としてのかけがえのない財産になっていると話します。

父の作業を振り返り、オリジナルの工夫も取り入れたという康祐さん。しゃちほこを成形するための台座にキャスターを取り付けました。「前回は、しゃちほこの周りを父がぐるぐる回りながら造っていました。狭い工房ですし、とても不便そうで…。今回は、台座をクルクル回せるので、人間は座ったまま動き回らなくてもいいですからね」とニッコリ。

父から息子、そして孫へ 受け継がれる鬼師の技

息子の修悟さんも康祐さんにとって心強い存在です。修悟さんは、東京のレストランでシェフやソムリエとして働いた後、4年前に帰郷、鬼師としての道を歩み始めています。今回は、父・康祐さんの指導のもと、小天守のしゃちほこ造りを担当しました。

修悟さんは「初めての体験ばかりですが、ものづくりと料理は似ていると感じました。料理は食べてくれる人が喜ぶ顔を想像しながらつくることが大切です。同じように、しゃちほこも「心待ちにしている県民や市民のみなさんの笑顔を想像しながら魂を込めて造ることが求められている」と感じたそうです。勝巳さんから康祐さんへと受け継いだ鬼師の技と精神は、三代目の修悟さんへ、しっかりと伝承されているようです。

4体のしゃちほこは8月、ついに完成。現在、熊本城に隣接する「湧々座」で一般公開されています。4体の新生しゃちほこが、天守の屋根に戻ってくる日が、今から待ち遠しいばかりです。

しゃちほこ一般公開中
●展示期間
大天守しゃちほこ（2体）：2018年2月28日まで
小天守しゃちほこ（2体）：2019年8月31日まで
●会場
歴史文化体験施設「湧々座」
熊本市中央区（桜の馬場 城彩苑内）
開館時間：午前9時～午後5時（最終入館時間）
入館料：大人300円、小中学生100円
☎096（288）5600

1 康祐さん（右）と修悟さん親子（工房で）。2 原寸大の木型。この型に照らし合わせながら成形は慎重に行われます。3 在りし日の先代・勝巳さんが、築城400年の際のしゃちほこを製作する様子（2006年）。4 「湧々座」に展示中の新生しゃちほこ（小天守用・写真は熊本市提供）。間近で見学できる絶好の機会

親子3代続く“鬼師”の技 天守閣のしゃちほこ復活へ

熊本地震により被災した県内の文化財や歴史的建造物などを守り、次世代につなげるために奮闘する“伝承人”がいます。その活動を紹介するシリーズ特集です。第4回は、熊本城のシンボルともいうべき、天守のしゃちほこ再生に尽力する「藤本鬼瓦」（宇城市小川町）の藤本康祐さん・修悟さん親子に話を聞きました。

先代の手掛けた遺作 天守とともに被災

「まさか自分の代で、再びしゃちほこを造ることになるとは、夢にも思っていませんでした」。県内で唯一、鬼瓦の製作を手掛ける「藤本鬼瓦」の代表、藤本康祐さんは、完成したしゃちほこを前にそう語ります。

熊本地震で大きな被害を受けた大小天守。多くの瓦が崩れ落ちるなか、各天守の一番上で熊本の町を見守っていたしゃちほこも破損しました。実は、壊れたしゃちほこは、康祐さんの父で2010年に亡くなった鬼職人の勝巳さんが、07年の熊本城築城400年に合わせて製作したものです。康祐さんは、その作業を勝巳さんとともに手掛けた経験を持ちます。

ところで、ほとんどの日本建築の屋根の端には、鬼瓦が鎮座しています。元来は、厄よけや魔よけの意味があり、1300年以上前に大陸から伝わったといわれます。しゃちほこも、その鬼瓦の一種。正式には「鯱瓦（しゃちがわら）」といいます。城の天守をはじめ、神社や寺院などの建物に設置された棟飾りです。頭部は虎で、体は魚に似た想像上の生き物がモチーフになっています。口から水を吐くといわれ、火よけのまじないともされてきました。

これらの鬼瓦造りを専門に行うのが〝鬼師〟と呼ばれる職人です。「藤本鬼瓦」は康祐さんの父・勝巳さんの代から続く、鬼瓦製作専門の工房。現在は、長男の修悟さんも弟子入りし、三代でその技が受け継がれています。

熊本地震で破損したしゃちほこの大きさは、大天守で高さ約120㌢、重さ80㌔。小天守で高さ90㌢、重さ50㌔。屋根の上にそれぞれ1対、載っていました。

「父は、築城400年で新しいしゃちほこを造ったとき、『今後100年、風雨にさらされても壊れない』と自信を持っていました。強度にも配慮して造っていたんです」。父・勝巳さんの遺作となったしゃちほこは、康祐さんにとっても誇るべき作品でした。

ところが2016年、熊本地震が発生します。康祐さんは震災直後、テレビで流れる熊本城の映像を観た瞬間、「しゃちほこがない！」とすぐに気付きました。どこかに引っかかっていないか、血眼になって画面の中を探しました。結局、大天守のしゃちほこは落下し破損。小天守は屋根に残っていたものの、台座が傾くなどの状態でした。父の遺作の惨状に、康祐さんは大きなショックを受けたそうです。

そんな康祐さんに昨年秋、ある知らせが届きます。それは、熊本城大小天守2対のしゃちほこの製作依頼でした。

職人の魂を込め 熊本城のシンボル再生へ

「熊本城の新しいしゃちほこ造りの依頼を受けたとき、プレッシャーを感じなかったといえばうそになります。天守のシンボル的な存在を自分が手掛けるわけですから…。しかし、県民・市民が復活を心待ちにしていらっしゃる。その期待に応えるような立派なものを造りたいという気持ちが、自分の中でどんどん強くなっていきました」と康祐さん。

今年3月から、土の選定や土作り、原寸大の設計図作製などの準備を進め、しゃちほこの形成に着手しました。設計図に照らしながら、粘土を下から丹念に積み上げる作業は、かなりの集中力と忍耐力を要したそうです。

7月中旬には形が出来上がり、乾燥の工程に入りました。工房には、4体のしゃちほこが堂々たる姿で、最後の窯入れの工程を待っていました。

康祐さんは「一から始めていたら、もっと大変だったでしょうが、父がやっていたことを間近で見ていたので、困難な工程はあらかじめイメージできました」。父の背中から学んだ前回の経験は、鬼瓦職人としてのかけがえのない財産になっていると話します。

父の作業を振り返り、オリジナルの工夫も取り入れたという康祐さん。しゃちほこを成形するための台座にキャスターを取り付けました。「前回は、しゃちほこの周りを父がぐるぐる回りながら造っていました。狭い工房ですし、とても不便そうで…。今回は、台座をクルクル回せるので、人間は座ったまま動き回らなくてもいいですからね」とニッコリ。

父から息子、そして孫へ 受け継がれる鬼師の技

息子の修悟さんも康祐さんにとって心強い存在です。修悟さんは、東京のレストランでシェフやソムリエとして働いた後、4年前に帰郷、鬼師としての道を歩み始めています。今回は、父・康祐さんの指導のもと、小天守のしゃちほこ造りを担当しました。

修悟さんは「初めての体験ばかりですが、ものづくりと料理は似ていると感じました。料理は食べてくれる人が喜ぶ顔を想像しながらつくることが大切です。同じように、しゃちほこも「心待ちにしている県民や市民のみなさんの笑顔を想像しながら魂を込めて造ることが求められている」と感じたそうです。勝巳さんから康祐さんへと受け継いだ鬼師の技と精神は、三代目の修悟さんへ、しっかりと伝承されているようです。

4体のしゃちほこは8月、ついに完成。現在、熊本城に隣接する「湧々座」で一般公開されています。4体の新生しゃちほこが、天守の屋根に戻ってくる日が、今から待ち遠しいばかりです。

しゃちほこ一般公開中
●展示期間
大天守しゃちほこ（2体）：2018年2月28日まで
小天守しゃちほこ（2体）：2019年8月31日まで
●会場
歴史文化体験施設「湧々座」
熊本市中央区（桜の馬場 城彩苑内）
開館時間：午前9時～午後5時（最終入館時間）
入館料：大人300円、小中学生100円
☎096（288）5600

しゃちほこの歴史

1599年（慶長4）	加藤清正が茶臼山で城づくりに着手（慶長6年着手説もある）。「慶長四年八月吉日」と銘打たれた軒平瓦が発見されているため、この頃、天守建造中で最初のしゃちほこが造られた可能性がある
1625年（寛永2）	熊本で大地震発生。天守も被害を受ける
1763年（宝暦13）	「宝暦十三未」銘入りのしゃちほこが複数製作される（未＝ひつじ年）
1858年（安政5）	天守のしゃちほこが強風により吹き折られる
1865年（慶応元）	男性が天守の屋根によじ上り、しゃちほこを引き落とそうとする事件が起こる
1871年（明治4）ごろ	大小天守の写真撮影が行われ、しゃちほこの姿も写る
1877年（明治10）	西南戦争開戦直前に大小天守ほか焼失
1960年（昭和35）	大天守・小天守の再建に伴い、しゃちほこを製作（製作者は文化財選定保存技術保持者であった兵庫県の故・小林平一氏）
2007年（平成19）	天守のしゃちほこに破損が見つかり、藤本鬼瓦が新たに製作
2016年（平成28）	平成28年熊本地震により、しゃちほこも落下、破損
2017年（平成29）	大小天守復旧工事に伴い、新たなしゃちほこを藤本鬼瓦が製作

しゃちほこの歴史

1599年（慶長4）	加藤清正が茶臼山で城づくりに着手（慶長6年着手説もある）。「慶長四年八月吉日」と銘打たれた軒平瓦が発見されているため、この頃、天守建造中で最初のしゃちほこが造られた可能性がある
1625年（寛永2）	熊本で大地震発生。天守も被害を受ける
1763年（宝暦13）	「宝暦十三未」銘入りのしゃちほこが複数製作される（未＝ひつじ年）
1858年（安政5）	天守のしゃちほこが強風により吹き折られる
1865年（慶応元）	男性が天守の屋根によじ上り、しゃちほこを引き落とそうとする事件が起こる
1871年（明治4）ごろ	大小天守の写真撮影が行われ、しゃちほこの姿も写る
1877年（明治10）	西南戦争開戦直前に大小天守ほか焼失
1960年（昭和35）	大天守・小天守の再建に伴い、しゃちほこを製作（製作者は文化財選定保存技術保持者であった兵庫県の故・小林平一氏）
2007年（平成19）	天守のしゃちほこに破損が見つかり、藤本鬼瓦が新たに製作
2016年（平成28）	平成28年熊本地震により、しゃちほこも落下、破損
2017年（平成29）	大小天守復旧工事に伴い、新たなしゃちほこを藤本鬼瓦が製作

1 康祐さん（右）と修悟さん親子（工房で）。2 原寸大の木型。この型に照らし合わせながら成形は慎重に行われます。3 在りし日の先代・勝巳さんが、築城400年の際のしゃちほこを製作する様子（2006年）。4 「湧々座」に展示中の新生しゃちほこ（小天守用・写真は熊本市提供）。間近で見学できる絶好の機会